



# おちほ

第67号 平成22年6月30日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 中嶋 貴一郎

## ワッショイ! ワッショイ! ワッショイ!



### 五月晴れ



### 氏神まつり

今年も5月1日、落穂寮では氏神まつりが行われました。4月は何やら天気が悪かったり、冬のように寒かったりと、4月らしくない天気が続きましたが、この日は素晴らしいお天気。絵に描いたような五月晴れです。利用者さん、職員共々、ハッピを着て集合、ではここで御神輿の紹介。今年のおみこしはスイスの粘土アニメ「ピングー」のキャラクター達。みなさんどこかで目にしたことがあるのでは？まずは主人公のピングー、その妹のピンガ、ピングーの友達のロボの三体です。この3体が、担がれたり、引っ張られたり、利用者さんの「ワッショイ、ワッショイ」のかけ声と共に東寺の坂を登っていきます。みんな元気いっぱい、毎日の歩行の成果でしょうか、あつという間に目的地の東寺グラウンドに到着。ここでは他の施設を交えたおみこしの紹介をしたり、ジュースをのんだり、のんびりと過ごしました。こうして今年も無事に終わりました氏神まつり、来年も晴天の中行きたいものです。



理事長 山下陽一

飛び出す「はらへこあおむし」

先日の朝日新聞「天声人語」欄に、「はらへこあおむし」のポップアップ（飛び出し）版絵本が紹介されています。四十年前から子どもたちに人気のある絵本ですから、親御さんたちもこれを見て成長した人たちもいるはずで、三十か国語に訳された世界中に読者を持つ絵本です。

わたし自身子どもを育てるころより絵本のファンとなり、幼児へのプレゼントとしてその子の発達年齢に応じた絵本を贈って「受けた！」「ダメだったか」などと喜んでいました。おとなの感性はつじつまが合っていないと解らないところがありますから「どこが面白いのかわからん」といわれた絵本をプレゼントしてその子に受けた時はなんともうれしいものでした。

さて、この飛び出し絵本を京都の書店で見つけました。出版社（偕成社）はかなり力を入れて販売を進めているのでしょいか表紙の赤帯に大きく「見本」と白抜きしてあります。コレコレと思つて開いてみました。りんごや洋ナシが立ち上がり蝶が羽根を広げたりしています。ところが、多くの見開き（左右のページ）で飛び出しの仕掛けが壊れているのです。

これを見たとき、待てよ、飛び出し絵本なるもの本当に子どもたちに焦点を当て作った絵本なのだろうか……。おそらく、この絵本は発達年齢三、四歳の子どもたちがターゲットでしょう。そんな年齢の子どもたちに丁寧に

扱わないと壊れてしまますよ、と扱い方を説明して、壊すママは「だから言ったでしょう！」と叱られるとしたら楽しんで。また、著作権の関係から原作者のカールさんにOKをもらつての出版だと思ひますが、彼自身も仕掛け好きですがこまでは願つていないのではないかと、思うのです。出版社は、「奥付」でとどめを刺して、幼いお子様は怪我をするかもしれないので気をつけましょう、と注意書きしてあるのです。

この出版社は児童書の出版に歴史があり、子どもたちの立場はよくわかっているはずなのですが、三歳児が注意して扱わないといけな絵本は本当に児童書といえるのでしょうか。

工作はおもしろい

わたしの友人I君は三歳三〇歳まではありません。先日二時間ほど一緒に遊ぶことになりました。幼児番組に「つくつてあそぼ」というのがありますが、身の回りの物を簡単に加工しておもちゃにして遊ぶよというもので、子ども達の発達過程をよく考えて制作されている番組です。I君とダンボールの切れ端を使つていっしょに自動車を作ることにしたのですが、彼にはかれの思いがあるようで、作っているうちに五〇センチ以上にもなる大きなものにしたらしいのです。よし、それならというので、キリンビールの空き箱をカッターで、広告のあるトラックをつくることにしました。運転席もいるらしい。ガムテープを貼り付けさせるとうまく貼り付けてくれます。車輪は発泡スチロールを円盤状に切り

取つて箸の車輪に取り付け、ボンネットの中央にキリンのマークが入った青いトラック。ボンネットの底にビニール紐を二メートルの長さのガムテープで貼り付けたら完成です。これは彼が気に入つたようで、紐を引っ張りながらトラックと散歩しました。途中、三雲養護学校の生徒を送つていた先生に「これ造つてもろた」と自慢すると、「おぼちゃんもほしいわ」との返事。トラックを引っ張つてグルッと一周してき次次第です。

制作過程で子どもたちはイメージをふくらませていくのか、自分の思っているトラックの大きさと、引っ張る紐が彼の遊びたい思いと一致していたようです。テレビ番組で作っていたものコピーではどうも子どもたちは納得してくれないようです。

逝つた母を想う女生徒のはなし

最近、実・連れ子を問わず、折かんにより子どもが死んでいる報道は耳目を引いています。頭を強打されたり激しく揺さぶられたりして死んでいってしまふ。その子は頭が割れるほど痛く苦しみながら亡くなつていったのでしょう、まったく残忍な話です。加害者の内縁の夫などは、「しつつけのためだった」と白々しい言い訳はどの事件にも共通しているようです。

昔から涙ながらの折かんの場面には人気があり、歌舞伎（菅原伝授生習鑑）に実母の折かんを合掌して受ける姫君の場面（杖の折かんの段）があります。物語の概略は次のとおり……  
養女にだした娘が帝の弟君と恋仲になり、そのことで養父（菅原道真）は窮地に陥ります。政敵の策謀により大宰府に流罪される途中、沙待の逗留とに

なつた先での話、実子の姫を問いただす実母が「憎うて、憎うて、コレこの杖折れるほどたたかねば丞相（養父）殿へ言い訳したぬ」と打ち揺えるのです。合掌して老母の荒折かんは受ける娘の姿に芝居見物の観衆一同は時代を超えて感涙しています。しかしながら、現代ではこの涙は少し疑問がある。

折かんは子どもにとつては常に理不尽なはず。合掌して耐えるなどマゾヒズムの大人ならまだしも、そんな親にとつて都合のいい解釈をする子どもはいるはずがない。親の立場に立たない限り杖の折かんは合理化されないのではないか。これは無抵抗の者に対する威圧的虐待以外になにもでもない、と。

ところで、子が親の立場に立てるはずがない！としたものの、最近の朝日新聞（二〇一〇年四月一七日「声」欄）に中学生の投書が掲載されていました。京都・南丹に住む十四歳の太野扶美可さん。5歳のときお母さんは病気で他界されました。臨終間際のお母さんの思いを「まだ幼く、三人姉妹の末っ子のわがままな私を放つておけない。自分がいなくても生きていけるだろうか」と推して「でも、母だつて、追つてくる死を考えると、私たちが、追つてくる死を考えると、涙を流し、何度も自分を責めたのではないでしようか」と述懐しているのです。大野さんは十四歳ですが、わたしなどは想像できないような精神的遍歴や苦勞を経てきたのかも知れません。母親のきもちに沿つて見ることができているのがよく感じ取れます。何もしてやれないで他界せざるを得ない親のきもちを推しはかることができるのは、やはり残された子どもだけが解きうる不可解なのかも知れません。

（二〇一〇・五・二〇）

# 落穂寮の六〇年

寮 長 中嶋 貴一郎

春を迎える言葉に三寒四温と言  
うのがありますが、今年はずい  
づい雨が続く、四月に入っても雪の便り  
が聞かれ、冬のような寒さが続き、  
五月に入った途端に真夏の暑さ

が訪れるという、あまりにも異常  
な春を迎えましたが、それでも落  
穂寮の表坂の桜は今年も満開の花  
を咲かせ、緑の若葉が芽吹いてい  
ます。どんな異常気象にあっても  
自然の営みは繰り返され、四季は  
巡ってきます。改めて自然界のす  
ごさ、偉大さを感じずにはいられ  
ません。

今年落穂寮は六〇周年を迎えま  
した。自然界の営みに比べれば  
微々たる年数ですが、六〇年と言  
う営みを繰り返して、一つ一つの歴  
史を刻み、伝統を積み上げてきま  
した。今改めて思うのは、六〇年  
前糸賀先生はどんな思いで落穂寮

を創られたのか、そして落穂寮の  
ありさまをどのような思いで見つ  
めておられたのか、そして今、存  
命であればなんとおっしゃるのだ  
ろうかと。

落穂寮は昭和二十五年  
(一九五〇年)五月一日に、それ  
まで近江学園におられた知的に重  
い障がいをもった児童のクラス  
「さくら組」の一三名の方が移り  
住んで開所しました。当時の落穂  
寮の開所の目的は知的に重い障が  
いをもった方のための生活施設と  
して、生活訓練の場、あるいは作  
業指導の場としての役割を担って  
の出発でした。以来六〇年間一貫  
して知的に重い障がいを持った方  
の受入れを行ってきました。その  
意味で創設当時の精神は今も守  
り継がれてきていると感じていま  
す。創設当時に比べれば、利用し

ておられる方の障がいの重さは比  
べようもないほど重度化してきて  
いますが。この六〇年、社会情勢  
はめまぐるしく変わり、国の障が  
い者施策や制度も、社会の障がい  
をもった人への理解も大きく変わ  
りました。ある意味大きな前進を  
見てきたと思つていますが、いつ  
の時代にあつても重い障がいをも  
った人は常に後回しにされ、利  
用できる事業の幅は限られてしま  
した。そういった状況の中で、常  
に重い障がいをもった人の側に  
たつて施設の運営を進めてきたこ  
とは、六〇年前に糸賀先生が落穂  
寮を創設された時にこめられた思  
いを受け継いできたのではないか  
と思つています。

落穂寮はこの六〇年の間に、十  
年前後の単位で新しい取り組みを  
進めてきました。一〇年目は新し  
い建物の建設と定員増による受入  
れ人数の拡大、二〇年目は大津南  
郷の地から石部の地に移転、三〇  
年目は寮独自の短期療育への取り  
組み、これは後の国の制度である  
短期入所へと引き継がれていきま  
した。さらには粘土の造形による

作品展の開催。生活ホームの開所、  
これは後に国の制度であるグルー  
プホームに引き継がれました。  
四〇年目は成人施設の建設で現在  
の杉山寮の建設の取り組みに入り  
ました。五〇年目は児童施設から  
成人施設への転換をはかり居住棟  
の建替えを実施しました。そして  
六〇年目の今年、新しい事業とし  
て地域生活支援事業をはじめまし  
た。

今、障がいをもつ人々への国の  
制度と社会環境が二転三転大きく  
変わり流動的な状況の中で、落穂  
寮の今後を考える時、常に重い障  
がいをもった人の側にたつた視点  
で落穂寮のありようを考えていけ  
たらと思わずに入られません。そ  
れが落穂寮創設の原点でもあるか  
らです。

今年の春の天候のように、極端  
で異常な状況が落穂寮に降りか  
かって来るかもしれません。落  
穂寮の表坂に咲く桜の木のよう  
に、凜とした姿勢であり続け、美  
しい花を咲かせる落穂寮でありた  
いと願っています。



▲大林さん、穴山 st、林さん

みなさん、はじめまして？  
 穴山秋男あなやまあきおといいます。  
 これまでアルバイトとして男子棟でお世話になっていましたが、このたび臨時職員として働かせていただくことになりました。  
 色々ご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、今まで以上に、頑張っておきますので、よろしくお願ひ致します。



# 2010 男子棟新人紹介



▲松山 st、中村さん、江龍さん

はじめまして僕は、鈴鹿短期大学を卒業し、こちら落穂寮で働かせていただくことになりました松山 尚史しょうしと申します。落穂寮で四月から正規職員として働きはじめ、約二か月が経ちますが、少しずつ仕事内容を覚えることができていると思ひますし、落穂寮で生活される利用者の方との関係作りも少しはありましたが理解できるようになりました。  
 しかし、利用者の方が自分の思いもしないような動きをされることもあり、対応の仕方に困ることもあり、まだまだ先輩職員の方に頼らなければならぬ場面があります。少しでも利用者さん一人ひとりの特性を理解し、より良い信頼関係が築けていけるように頑張ろうと思ひますのでよろしくお願ひします。



▲川原 st、矢部さん、森川さん

京都保育福祉専門学院を卒業し、この春から落穂寮男子棟に勤務させて頂くことになりました川原 薫かほと申します。私は昨年の五月に知的障がい者授産施設で実習をさせて頂きました。その時に障がいを持った方と初めて関わりを持った。三週間という短い期間でしたが、障がいを持った方達がとても生き生きとされているのを見て障がいを持った方のことをもっと知りたいと思ひ福祉の仕事を選びました。  
 他の県と比べて福祉に早く取り組んでいる滋賀県のなかでも、落穂寮は古くからあり、落穂寮で働くことで自分自身が対人援助者として成長できると思ひ落穂寮に就職させて頂きました。利用者の方一人ひとりを理解し、その方に合った対応ができるよう頑張っていきたいです。これから一生懸命頑張っていきたいと思います。よろしくお願ひします。



▲元二さん、植西 st、じゅんさん

はじめまして。この春より落穂寮の男子棟で働かせて頂く事になりました植西 勇貴ゆうきと申します。  
 私は、びわこ学院大学(滋賀文化短期大学)人間福祉科人間福祉専攻の出身です。私が落穂寮に就職した理由は、私の弟が知的障がい者で昔から養護学校の行事に参加しながら知的障がい者と関わっていくうちに「知的障がい」という分野をもっと勉強したいと思ったからです。入所型施設である落穂寮でなら、朝から夜まで利用者さんと身近に接していけると思ひ就職させて頂きました。  
 初めての「人」と関わる仕事なので、慣れない事ばかりでいろいろご迷惑をおかけすると思ひますが、よろしくお願ひします。



▲脇田さん、田村 st、沢さん

本年度より落穂寮で働かせて頂くことになりました田村 和昂わかつたかです。  
 京都保育福祉専門学院で保育科を専攻し、様々な施設で実習する中で、障がい者施設での実習は難しさ、厳しさの中にも楽しみを感じ、この方たちの役に立ちたいという思ひから落穂寮への就職を決めました。  
 仕事をさせて頂いて、まだまだ慣れない部分もありますが、とても楽しみを感じながら働かせて頂いています。利用者の方との生活は日々発見があり、それらについて職員同士で真剣に考えたり、喜びあえたりする中で、職員として何が必要なのかを見出し、いけるような支援を目指して頑張っていこうと思ひますのでよろしくお願ひします。



▲細木さん、小島 st、北村さん

この度新しく仲間に加えていただくことになった、小島 昌平しょうへいです。  
 大谷大学文学部社会科学科臨床心理コースで心理学を学んでいました。  
 この度ここ落穂寮に就職しようと思ひたのは、大学生時代に四年間打ち込んでいて現在も続けているボランティアと出会えたからです。  
 ボランティアでは障がいのある子供達と一日を共に過ごすというのをやっていました。  
 子供達と接しているうちに、接することの面白さを味わうことができ、次第に知的障がいや自閉症というものにも興味をもつようになり今現在にいたります。  
 常に学び続けることを忘れず、利用者さん第一に考えた支援が出来るよう努めていきたいと思ひます。



▲佐山さんと井上stと西尾さん

初めまして。平安女学院大学を卒業し、四月から落穂寮の女子棟の職員として勤務させて頂くことになりました井上沙知です。

在学中にあらゆる施設での実習やボランティアでの学びを通して、障害を持つ人、私たちに持つていないものに惹かれ、障害を持つ人に携わる仕事をしたいと思い、障害者にこだわり続けた結果、落穂寮に就職することになりました。

利用者さんの個性や考えを理解し、必要な支援が出来るように、一人ひとりの利用者さんと積極的に関わり、お互いの成長と共に一人ひとりの利用者さんと関係を築きたいと思っています。そして素敵な先輩方のような職員になれるように頑張りたいです。

私自身、まだまだ未熟者で至らない点も多く、色々ご迷惑をおかけすると思いますが、利用者さんとの関係を築けるように精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願い致します。

滋賀文化短期大学(現、びわこ学院大学)を卒業し、落穂寮で勤務させて頂いたことになりました、島津亜理沙です。

介護福祉士として卒業した私は、落穂寮へ来るまで、障がいを持った方たちと接する機会は殆どありませんでした。高齢者との関り、高齢者福祉の現場しか経験した事がなかったため、「驚き・新たな発見」が連続している日々です。人との関り、共に生活していく上での難しさを改めて実感することが出来ました。

自分自身の成長の場・チャレンジの場として、いつでも笑顔でいることを忘れず、後悔のないよう頑張っていきたいと思っています。

未熟な面が多く、多々ご迷惑をおかけすると思いますが、よろしくお願い致します。



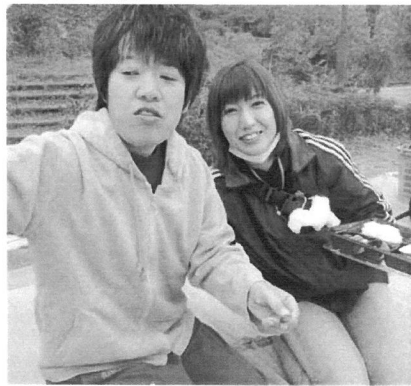
▲島津stと村井さんと村上さん

初めまして、居宅介護のヘルパーとして採用頂きました南千代と申します。新人というには、少し年増ではありますが…。

若年の頃の私は、福祉などには全く関心も何もありませんでした。

しかし、家庭を持つてから約二十年、これまでに色々な福祉の方や福祉制度を利用して頂き、感謝の気持ちを持つています。しかし、福祉制度を利用したくても利用できないという方もおられ、地域内での偏見や行政機関の理解の乏しさに公憤を抱くこともありました。未熟な私がこれからだけができることができるかわかりませんが、「人として人間らしく生きる」を題材に、残りの人生約半分を落穂寮の方々と楽しく過ごしたいと思っています。

▼三沢さんと南st



# ◆女子棟★新人紹介2010◆



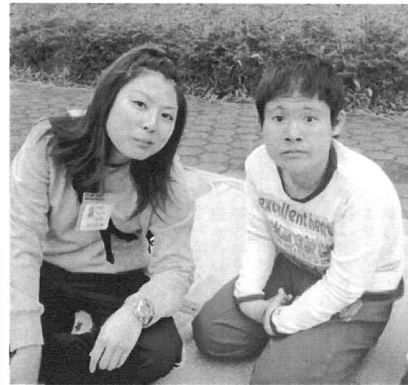
▲和田stと小林さん

初めまして。京都にある龍谷大学短期大学部を卒業し、四月からこの落穂寮で働かせて頂いています、和田優です。

私は、両親が福祉の現場で働いており、幼い頃から福祉に関わることが多かったことから、いつか福祉に関わる仕事がしたいと考えていました。短大で福祉を学び、実習などで障がいを持った方たちと関わってからは、福祉の中でも知的に障がいを持った方たちと関わる仕事がしたいと具体的に考えるようになりました。そこで、学校の先生に落穂寮を勧めて頂いて、落穂寮の話聞いてここで働きたいと思うようになりました。

まだまだ分からない事だらけで、たくさんご迷惑をおかけすると思いますが、一生懸命頑張りますので、ご指導よろしくお願致します。毎日笑顔忘れずにがんばって生きてみたいです。

▼小泉stと渡辺さん



初めまして。華頂短期大学幼児教育学科を卒業し、四月から落穂寮女子棟職員としてお世話になっていきます、小泉友里です。

在学中は幼児教育分野の学びを深めて来ましたが、大学一回生の二月頃に実習で来させて頂き、利用者さんと一緒に生活することで、ここで働きたいと思い、縁あって働かせて頂くことになりました。

福祉についての知識は乏しいですが、実習で学んだことを活かし、利用者さん達と向き合っに行きたいと思っています。

まだまだ勉強・経験不足ですが、先輩方の姿を見て学び、精一杯頑張りますので、これからよろしくお願致します。

▼青山stと松井さん



はじめまして。京都保育福祉専門学院の保育科を卒業し、今年から落穂寮・女子棟職員としてお世話になってる青山歩です。

障害者福祉に興味を持ったのは専門学校に入學してからですが、二年間、授産施設や障害児施設等に実習・ボランティアに行かせて頂き、様々な障害を持った人たちと関わる事ができました。落穂寮でも一年前に実習させて頂き、楽しく充実した時間を過ごさせて頂きました。

まだわからないことだらけで、知識や経験も不十分ですが、先輩方や、利用者さんから色々学び成長していきます。明るく、笑顔で頑張りますので、よろしくお願い致します。

# 還暦を迎えました



このタイトル  
だと、写真の男  
性が還暦を迎え  
たようにみえま  
すが、そうでは  
ありません。

利用者さんにとつては、毎年恒例  
のごちそうが出る日...との認識もあ  
る六〇回目の開寮記念日でした。

職員も増員された為、嬉しい悲  
鳴ではありますが、食堂内は人が  
溢れかえり賑やかな雰囲気の中  
での昼食会でした。

勤続表彰もあり、今年は十年表  
彰で松尾隆浩支援員。利用者さん  
の安定にはやはり職員の勤務年  
数は大きく影響を及ぼします。今  
の女子棟の安定があるのも松尾st  
のがんばりがあつての事です。

落穂寮の明るい未来の為に、  
後輩職員は十年表彰を目指し、松

▼夏美さんと松尾st.とてあえず10年分の感謝を！



新年度が始まり、一番初めの行  
事。4月23日は、遠足でした。

男子棟は「道の駅こんぜの里」  
女子棟は「十禅寺・緑地公園」。

今年は桜が開花してからの雨つ  
づきで、すっかり桜も散ってしま  
い見事な葉桜になってしまいました。

この日は、お天気に恵まれず四  
月にしては少々肌寒い一日となつ  
てしまいました。利用者さんの体  
力に合わせ、それぞれのコースを  
歩かれています。お昼ご飯はお弁  
当。いつもより長い距離を歩かれ  
て、皆さんお腹はペコペコの様子。  
寮での食事とは違い、外で食べる  
ごはん。皆さん美味しそうに食べ  
られていました。

来年度は、天気と桜に恵まれた  
遠足になるといいですね。

尾stには還暦表彰を目指して行っ  
てもらいたいものです。

▼豪華★海鮮丼を堪能中



# 春の遠足



# 泉

▽五月一日から、落穂寮の新たな事  
業として、居宅介護事業が始まりま  
した。地域で生活されている障が  
いを持った方に対して、これまで  
二十四時間対応型の施設ということ  
で短期入所事業と言う形でサービ  
スを提供してきました。しかし、それ  
には施設まで来ていただかなくては  
サービスを受けられないと言う不便  
さがありました。必要な方には、こ  
ちらからサービスを提供しに何うこ  
とで、より多くの方に地域での生活  
を継続していただくことができるの  
ではと考えております。

始まったばかりでまだ上手く機能  
しておりませんが、これまでの事業  
同様、よろしくお願い致します。

# 木言

成長の速さはみんな違う。  
土の良し悪し、肥料の多い少ない、  
気温の高低、愛情不足？  
眺めているだけで育つものはいない。  
新しい土地に落ちた種ならなおのこ  
と、育てなければ育たない。  
根気よく育てて、成長した喜びを共  
に分ち合おう。